Stone 20XX - current place

Tomoya

http://labyrinth.design/

僕は子どもの頃から石ころが好きだった。
ひとつひとつ違う形、表情や質感、この世にひとつしか無いものであるということなど、石ころに感じる魅力は様々ある。石ころ以外にも、例えば空を流れる雲の形であったり、砂浜に寄せる波の表情であったり、生き物や植物の造形や広がる自然の景色など、この世に在る様々なものにも魅力を感じるけど、これらのものは移ろいの中に存在している。対して石ころは、ひとりの人間が生きる数十年といった時間軸の中ではほとんど移ろうことなく、まるで不変のものであるかのように感じられ、僕にとっては、一際、魅力的なものに見える。不変とは、変わらずそこに在り続けるということだとすれば、《積み重ねられた時間》というものが不変を成り立たせる最も重要な要素になる。石ころには、僕の手に拾われるまでに積み重ねられてきた膨大な時間の存在を想像させられる。

僕が石ころを拾う場所は大抵、地元にある海岸で、年に数回、精神的な癒しなどを求めて夕方ごろから出かけていく。海岸に着いてから目の前に広がっている石ころの風景は、社会を生きる人間たちのようにも見える。ひとつひとつ手に取ってみるとそれぞれに個性があり、面白い表情をしているけど、手から放してしまうと大量に広がる石ころの中では無個性なひとつの石ころに戻ってしまう。明らかにほかとは違う強い個性を放っている石ころは落ちていないかと、自分の足元を見ながら数百メートル以上の距離をとぼとぼと歩き、気にいった石ころがあれば家に持ち帰っている。

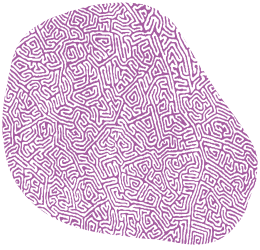
人の時間軸では不変のものに見える石ころも、数百年、あるいはそれ以上の時間軸で見れば、絶えず変化をしている。変化をしているということは、生きているということだ。不変のもののように見えながらも数百年以上に亘って生きてきた石ころが、死を迎えるときは存在する。それは、石ころが僕の手の中に収められた瞬間になる。僕に拾われなければ、これからも数十年、数百年以上の時間をかけて、元々存在していた環境の中で割れたり、削れたり、風化したりと変化していったはずの石ころが、生きたまま死を迎えた状態になってしまうのだ。

石ころ以外にもうひとつ、僕が子どもの頃に好きだったものに、迷路がある。緻密な迷路を書くと、クラスの同級生たちは喜んだ。年齢を重ねて迷路に対する関心も薄れる中、2010 年、絵本迷路の作家・香川元太郎さんを紹介する新聞記事を読んだことがきっかけとなり僕も迷路作家になることを決意した。迷路は、紀元前 2000 年以上前には死と生まれ変わりの象徴としてあったという。僕は、迷路は人が持つ迷いの感情が生み出したものだと考えている。迷路が迷いの象徴だとすれば、これ以上の迷いが発生しない埋め尽くされた迷路というものは、まさに人の死の状態を示していると言えるだろう。迷路作家になりたいだけなのであればパソコンを使って作品を制作しても良いけれども、なぜ僕が手書きでの制作にこだわっているのかという理由について、2013 年 8 月に以下のように述べている。

“　パソコンを使って自分が制作しているような迷路を描いて人に見せた場合、制作に注がれた時間の存在と重みが正確に伝わらなくなると考えるからです。コンピューターが持っている、早く、簡単で、正確というイメージにより、作品から受ける時間の捉え方が歪められてしまうのではないかと思いました。人間は感じることができる生き物なので、手書きで描かれた作品を見れば、例え具体的な制作時間はわからないとしても、目の前にある作品に注がれた時間の存在を、己の身体感覚に置き換えて想像することができるはずです。積み重ねられた時間が生み出す力はあると信じるので、手書きで制作します。　“

2016 年の 4 月になって、僕にとっては腑に落ちる形で、迷路と石ころが結びついた。僕が拾う石ころとは、僕自身が強い魅力を感じたものたちであり、僕の人生の中で偶然めぐり合ったものたちである。手に取った石ころを眺めながら、正面となる顔の位置を決め、その輪郭線を抽出し、元の石ころの何倍もの大きさに拡大する。拡大した石ころの形の平面パネルを作り、その中を僕の迷路で埋め尽くす。迷路の線や背景の色、表情などは、僕が石ころから感じたもの、あるいは、僕の価値基準で良かれと思うもので仕上げて作品とする。ここから生まれる迷路の作品と石ころは、強い結び付きを持った対の関係のものになる。石ころがあったからこそ、ひとつしか存在し得ない形の迷路の作品が生まれ、作品が生まれたからこそ、石ころにも、石ころそのものだけを愛でるという価値観以外の新たな価値が増すこ

とになる。つまりは、作品と石ころが相互に存在を高め合い、切り離せない関係のものとして成立することになるのだ。

今この瞬間、同じ時代に生きている人たちは、同じ時間を生きているようにも感じられるし、それは事実とも言える。しかし、ひとりひとりの人間に与えられた時間を見れば、それぞれがこの世にひとつしかなく何事にも代えることができない時間を、死に向かいながら生きている。僕は、江戸川乱歩も好んで使った＜うつし世はゆめ よるの夢こそまこと＞という言葉が好きだ。どうせ夢なのだから、僕は自分の好きなように生きていくよという精神が、今の僕のライフスタイルになっている。ひとつの場所に並べられた迷路の作品と石ころには、《積み重ねられた時間》、《死を迎えた状態で在るもの》、《この世にひとつだけしかないもの》という３つの共通する意味が、人の手に寄らない必然的な形で与えられている。《それぞれにひとつだけ与えられた一度限りの命＝時間》について、思いを巡らせるきっかけとなるような作品になってくれれば幸いだと思っている。

2016.4.30 22:50